

# 滝の音

川崎ゆきお

地下に溜まり場がある。

人々が溜まっている。立ち止まっていると言ってもよい。

そこは地下鉄構内の片隅だ。プラットホームなのだが、その場所には車両は停まらない。もう少し中央側に寄らないと、そこからは乗れない。

船橋がふと気づいた時には、そこに立っていた。他にも立っている人々がいるので、特別な場所だとは思わなかったのだ。

茫然と立ち止まっている感じで、電車を待つ風ではない。

並んでいるわけではないし、ドア位置のマークもホームにはない。

線路を背にし、壁を見ている人もいる。

いずれもビジネス街でよく見かける一般的な勤め人の男女だ。

アナウンスが流れ、電車が入ってきた。車両は目の前を流れた。

間違った場所で待っていたと思うのなら、中央側へ移動するはずだが、その連中は動こうとしない。

船橋はそこまで注意深く観察していたわけではない。ただ、なんとなく、どこかで立ち止まっていたただけなのだ。

他の連中もそうなのかもしれない。

船橋は会社で嫌なことがあった。家に帰ってもそうだ。居心地のよい場所などない。それがもう日常的になり、慣れてしまっているのだが、どこかで安堵の思いをしたい。

その思いをこのプラットホームの端がかなえてくれるわけではないが、とりあえず居られる場所だ。

電車は何本も通過した。正確にはこの駅で停車しているのだが、外れているため通過車両ばかりのように見える。

誰も立ち寄ってくれないホームということなのだが、この連中にはふさわしいのだろう。相性のよい状況と言ってもよい。

一人が、ずっとホーム中央側へ歩きだした。まるで行を終えた行者のように。

それと入れ替わるように新入りがやってきた。立ちやすい隙間を見つけ、そこで立ち止まった

。

船橋はタバコを吸わないが、喫煙場所に似ている。当然駅構内は全面禁煙なので、ここには喫煙所はない。

船橋は目を閉じた。構内の雑多な音が次々と耳に入る。

電車がまたはいってきた。

「あ、滝の音に似てるなあ」

船橋は明日も立とうと思った。